

ほつかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX 011-210-5826

私は旭川・上川管内の小学校に34年間勤務した後、昨年4月から道教育大学旭川校教職大学院に実務家教員として勤務している。最近は、ドラッカーに代表されるように学校にもマネジメントによる説明責任や結果責任が短いサイクルで求められるようになり、学校現場は慌ただしい毎日を送っている。全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)が実施されてからというもの、特にその傾向が強くなつた。

私が現場にいた最後の4年間は、旭川市立新町小学校の校長だった。「教育に近道なし」。たくさんの先輩から教えていただいたように、知・心・体のバランスのとれた「生きる力」の

私は旭川・上川管内の小学校に34年間勤務した後、昨年4月から道教育大学旭川校教職大学院に実務家教員として勤務している。最近は、ドラッカーに代表されるように学校にもマネジメントによる説明責任や結果責任が短いサイクルで求められるようになり、学校現場は慌ただしい毎日を送っている。全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)が実施されてからと



このほか空知管内妹背牛町立妹背牛小の柳谷直

明校长(53)、帶広市立西陵中学校長(53)、帯広市立西陵中学校長(53)

川市立春光台中の福澤秀教頭(49)の3人の再任も承認された。

新しいNIEアドバイザーが決まった。釧路管内白糠町立庶路小の中原英雄教頭(50)、小樽市立北山中の高橋恒雄教頭(46)、函館市立亀尾小中の平沼和彦教諭(48)、釧路市立芦野小の渥美清孝教諭(43)の4人。活動歴は2面参照。

日本新聞協会 新アドバイザー4人決定

中原教頭(白糠)らに委嘱

認された。2014年度は任期中の苫小牧市立日新小学校の富岡賢晃教諭(55)、札幌南高の志田淳哉教諭(42)、網走市立網走小の渋谷涉教諭(36)の3人を含め、前年度より2人増の計10人体制となる。

NIEアドバイザーの任期は3年間。経験豊かな現役教師などを全国各地のNIE推進協議会が推薦し、日本新聞協会が承認する。

これまでアドバイザーが不在だった釧路・根室地区に2人、小樽・後志地区にも1人がそれぞれ新たに誕生。校種別でも小学校5人、中学校4人、高校1人というバランスの取れた配置になる。

I-E推進協議会が推薦し、実践を始める教諭への指導助言、NIEの重要性や教育効果のPRのほか、全国レベルでも新聞協会の諸活動に協力してNIE活動の実践を始める活動に当たる。

12年度までは都道府県ごとに5人という上限があった。これに伴って北海道はアドバイザーを5人から8人に増員、14年度はさらに2人多い合わせて10人という顔ぶれになる。

これまでアドバイザーが不在だった釧路・根室地区に2人、小樽・後志地区にも1人がそれぞれ新たに誕生。校種別でも小学校5人、中学校4人、高校1人というバランスの取れた配置になる。

眞の学力向上とNIE

道教育大旭川校教職大学院教授 水上丈実

んでくれた地域や読み聞かせの会の方々、カブトムシの幼虫捕りやキャンプなど

わせて語つてくれる人であつた。

新聞を読む大人の姿を子供たちが、大人になつた時にどうなるかは自明である。

現在旭川では、NIEア

県越えという成果を得た。これは教職員の努力だけでなく地域・家庭との連携があつたからこそ実現できただと思ってる。

新聞についても家庭の考え方にも影響されるのではないか

育成を目指した。校務運営組織も学力・心力・体力方向上部の3部に改編し、「生きる力」の向上に取り組んだ。

そのかいあって2013年度の全国学力テストは、全ての領域で全国一の秋田だ。

そして土曜休業日の子どもたちの活動の受け皿として、図書館開放や体育館開放でスポーツ体験に取り組み、特に祖父母は読んだことを自分なりに解釈しながら、自分の人生と照らし合

いか、と考えている。私は両親が働いていたため祖父母に育てられた。祖父母は、二人とも交代で虫眼鏡で新聞の隅から隅まで読み、特に祖父母は読んだことを自分なりに解釈しながら、自分の人生と照らし合

いに期待したい。また、そのため新聞社は、社会的事象に敏感に反応し、子どもも新聞を読んでいるということを忘れてはいけない。そうすることによって、あらゆる社会事象に対する考え方を堂々と主張できる真の学力を身に付けた子どもたちに育つであろう。

「校長先生の授業」で学ぶ

北海道NIE研究会副会長の上村尚生校長(56)の授業が今年3月、札幌市立稲穂小で行われた。大手コンビニが米飯商品を道産米に切り替える記事が載った北海道新聞作成のワークシートを使い、地産地消の大切さなどをじっくりと考えさせた。

(葛西信雄・北海道新聞NIE推進センター委員)

地産地消の重要性を理解



新聞で社会を知り自分の考えをしつかりもつてほしい。こんな思いを卒業する6年生91人に託す「校長先生の授業」の一環。3月3日から3日間、卒業間近だった6年生の1・3組の教室でそれぞれ行つた。

す②コメ消費量のうち道産米の割合を示す「道内食率」向上を目指す道の取り組みへの協力が狙い一の2点を柱にした記事。

まず内容を読み取らせるために上村校長と、指名した児童一人が記事を朗読、「道内食率」「地産地消」といった意味を確認させた。その後で「地産地消のメリットはなんだろう?」と

上村校長は「それじゃ、私たちはどうすれば地産地消を広めることができる?」とワークシートにはない質問をたたみかけ、一人一人に意見を発表させた。

バイザーで、実践歴約20年を誇るベテラン。現在、学年ごとに教科や単元、学習内容と新聞を使った活動を年間を通して位置付ける「札幌市小学校NIE計画表」作成にも当たっている。

問い合わせ、記事に出ていない分も含めて記述させた。

せんせい記者日記

新聞記者が 教壇に立った!
多感な生徒たちの心事
先生たちの忙しさ。
教員免許講習を持つ記者が、
公立中学校で教員研修に接続した2カ月。

ムで、計62回にわたってリポートした。本は四六判・216[×]。各回800字前後を8章に分け、連載途中に寄せられた読者からの感想も収録した。「試験・行事・会計事務」などと題した回では、2月28日に

ちの様子を、彼らの「本音」を交えて紹介している。

公立中学校の教壇に立つた若い新聞記者が思春期の生徒と指導する先生の日常を通して、心の動きにまで踏み込んでルポルタージュした信濃毎日新聞社（長野市）の連載「せんせい記者日記」が、同じタイトルで同社から出版された。

連載は、長野で相次いだ不祥事を背景に、「根本から教育を問い

直すキヤンペーンの一環」(小六昭夫・同社報道部長)として企画された。執筆者は教員資格を持つ報道部の小坂真希記者。昨年1月から7ヶ月、「研修生」として派遣された県内の須坂市立相森(おおもり)中での体験をほぼリアルタイで夕食をともにした先生の一人が「これから学校に帰る。午前0時まで終わるのが目標」と話し、別の先生は「昨日は午前2時までかかった」と語る。学年末の職員室、連日深夜まで仕事に追われる先生た

「せんせい記者日記」発刊

信濃毎日新聞社

学校現場リアルに紹介

ライドがある」「十数え、それでも怒るべきことがあれば怒る」「でも100点だったと思える叱り方なんてないよ」。いじめ考える集会、ネットや携帯の危険性、トイレ清掃など。密着取材で得られた事象が、みずみずしい感性の「フィルター」を通して客観的かつ簡潔にまとめられている。小坂記者は「今の生徒、今の先生、今の保護者を分かつたつもりでいたが、（取材を通じ）とてもひとくくりにはできず一人一人が全く違っていることが分かった」と話している。

切に「する人に投票する」というユニークな意見も。上村校長は、「中学生になつたら英語の単語などを覚えるのも大切」と前置きした後、「先行きがはつきりしない時代にあって、自分で判断できる力をぜひ身に付けてください」とエールを送り、授業を締めくくった。

男子児童は「どつても樂しかった。新聞つていろんなことが書いてあることも分かった。中学生になつたらできるだけ新聞を読みたい」と笑顔で感想を話して

「切ににする人に投票する」というユニークな意見も。上村校長は、「中学生になつたら英語の単語などを覚えるのも大切」と前置きした後、「先行きがはつきりしない時代にあつて、自分で判断できる力をぜひ身につけてください」とエールを送り、授業を締めくくった。

男子児童は「どつても樂しかった。新聞つていろんなことが書いてあることも分かった。中学生になつたからできるだけ新聞を読みたい」と笑顔で感想を話していた。

道内高校新聞

9

ナウ

B4判両面の月刊「翔雲」のほか、高体連や学校祭などのニュースを載せる速報「翔雲PLUS（プラス）」を年間約80回発行。2013年度の全道高校新聞コンクール（道高文連、北海道新聞社主催）の「手書き・ワープロ部門」で5年連続5度目の総合賞を射止めるなど、すっかり「道北を代表する新聞局」の名声が定着している。

ここ数年では、原発問題をさまざまな角度から掘り下げた12年度の紙面が耳目を集めた。

幌延深地層研究センター や北電旭川支店の取材に加え、脱原発を目指すドイツの政策を学ぼうと、札幌市まで足を運び北大大学院の吉田文和教授（環境経済学）にもインタビュー。同研究センターの現状と課題、反原発運動に取り組む人々の思い、大量の電力を必要と



編集作業に当たる新聞局員たちと指導する松本教諭（左から3人目）

編集後記

○…仕掛け、は意外に含蓄に富む用語だが松下幸之助はこんな使い方をしている。「1店舗のナショナルショップが10個買ってくれたら全国で50万個売れる『仕掛け』を作つてあるのや」(岩瀬達哉著「血族の王」、新潮文庫)。日本中に販売網を広げた経営の神様の言い分には、豊かな発想や工夫、努力といった自負も見え隠れする。

○…最近、感心させられる仕掛けに出合った。信濃毎日新聞社発刊の「せんせい記者日記」だ（3面参照）。おやじギャクをかますとNIEならぬR I E（教育に記者=Reporter=を）。要請した同社の発想もさることながら、個人情報の管理に重い責任のある教育行政側が、よくもまあ～承諾したものである。端的に「公認の潜入ルポ」というような仕掛けだ。

○…一気に読み終えすがすがしい気分になつたが、小坂真希記者の取材とペンの力によるところが大きい。先生と生徒に溶け込み、それでいて第三者の目も忘れていない。文章はリズム感があり構成力にも優れ、ひと言でプロが全力で取り組んだ仕事なのだと感じた。幸之助はこんなニュアンスの発言もしている。要は、(仕掛けが)機能するかどうかも人間の力にかかっているのやー。(葛)

ライバーートカメラだ。デジタル一眼レフで、スポーツ競技などの激しい動きにも難なく対応、表情豊かな力

メモ
同校は、全国高校新聞年間紙面審査（高文連など主催）でも5年連続で入賞した。昨年夏の長崎大会には二宮局長と石原歩実副局長が参加し、他校の生徒と長崎市の平和公園などを合同取材、特集新聞を作る経験を積んでいる。

年退職した工藤幹男さんは「開成新聞事情」(高校生新聞のこれまでと現在)のテーマで講話。いつたの、2004年に入局した生徒1人と一緒に復刊にこぎ着けた思い出などを披露した後、「校風に合わせた編集方針が高校新聞の使命なのではないかと思つて いる」などと話した。

する地元企業の脱原発に対する不安などを丁寧に伝え、第42回全国高校新聞コンクール（大東文化大主催）で上位6番目にあたる優秀賞に輝いている。

身近なテーマも追っていく。昨年11月の月間版では、体育館などの雨漏りについて特集。強雨の日には「バケツに3分の1ぐらいの雨水がたまる」と実態を

報告する一方、道教委の担当職員から「暖房設備など必要度の高い学校から修理を実施している」とのコメントを引き出した。

(土別)

多彩な紙面づくり持ち味

局員の取材で力を發揮するのですが、その松本教諭のプ

ツトが紙面に躍動感を与えていた。記事については5W1Hをベースにした分かりやすい文章と、一人でも多くの生徒の名前を記述するような工夫をしている。二宮局長は「今年は地元産業に大きなインパクトを与えるTPPの行方などを特集してみたい」と張り切っている。

高校教諭20人
研修会に参加